

「喪男（モダン）の哲学史」

本田透／著

講談社

2006年 12月発行

2階一般開架図書（請求記号：130.4）

喪男＝もてない男のルサンチマン（恨み・ひがみ・うらやみ・劣等感・エトセトラ）が学問や芸術への熱意を生み出すという話は別に新しくない。この本の新しいかもしれないのは、「2次元＝観念や理想」と「3次元＝現実」の世界との、一種の「せめぎあい」に哲学・思想の源泉を見出していること。「唯物論」という「思想」はそれ自体、「観念」ではないかという指摘は同感（しかし、唯物論というのは、観念も物の働きということなのだろう）。

著者の高校2回中退、大検で大学に行くが中退して違う学科で卒業し、出版社勤務後フリーという経歴もなにか哲学で、妙に3次元的説得力がある。

過激な表現もあって青少年おすすめとは言いにくいところだが、哲学や思想の本質は鋭く突いた本。世界がよくわかった気がするか、ますます頭の2次元的混迷を深める本。

「漂泊の王の伝説」

ラウラ・ガジェゴ・ガルシア／作 松下 直弘／訳

偕成社

2008年 3月発行

1階児童開架図書（請求記号：96カシ）

六世紀に実在したと伝えられる漂白の詩人をモデルにした運命についての物語。人の運命はあらかじめ定まっているのか、それとも変えることができるのか。

砂漠の王国、キンダの王子ワリードは、貧しい絨毯織りの詩によって、夢と名誉を奪われてしまう。憎しみにかられたワリードは、その男に〈人類の歴史をすべて織り込んだ絨毯〉をつくれと、難題をもうしつける。

ワリードは、絨毯織りへの不当な仕打ちに気づき、後悔するが絨毯織りは死んでしまう。後悔の念はさらにもっと深く罪の意識となって、ワリードを苦しめる。しかし、〈漂白の王〉となって遍歴し、盗賊、ベドウィン（遊牧民）、商人たちと交わる間に、ワリードはそれまでとは異なる生き方があることに気づき、そのたびに思い直して新しい生き方を選ぶ。そして、悩み続けたワリードが、最後に取り返した絨毯の中に見たのは・・・。

しっかりした筋立て、簡潔で美しい文章は語りをきいているような心地よさがある。また、ひとりの王子の人生を通して、時代を超えて人の生き方を問いかける物語でもある。